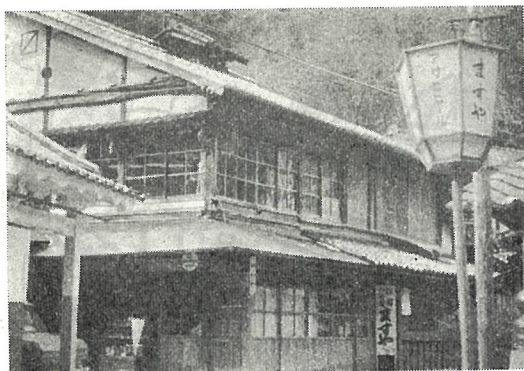




同志社

歴史散歩

清滝

平林 一

奥嵯峨のトンネルを抜けると、そこに清滝の里がある。

清滝の里について『嵯峨誌』は、

「この地や山縮り谷迫りて束ぬるが如く、清冽なる川水淙々としてその間を流れ、兩岸の樹木翠滴るが如く、炎陽の隠るること亦早きを以て納涼避暑に最も宜し、或は子規を尋ね或は河鹿を聞くなど、清閑の遊にも適せり。」と記している。

清滝の里は、愛宕山に登る途中の里であり、新緑、紅葉、ともに佳景の土地なのである。古人もまた、つぎのようにうたっている。

「降りつみし高根のみ雪とけにけり清滝川の
水のしらなみ

清滝や波に散込む青松葉

西行 芭蕉

清滝はまた、同志社に学んだ多くの人々にとって忘れがたい土地なのである。彼らは勉学の間に清滝に遊び、若き日の思索を深め、あるいはまた、青春の苦悶をやわらげたのである。そしてまた、河畔の宿において会合をし、その友情を深めたのである。そのとき、彼らの声なき声は山谷をさまよい、酔ってはなつ美声は、清滝川のせせらぎと相和したのである。

蘆花・徳富健次郎もまた、青春の苦悶と悲哀を抱きながら、清滝に遊んだ同志社の学生であった。

徳富蘆花が同志社に再入学したのは、明治十九年九月のことであった。蘆花十九歳（数え年）のときである。学友には徳健さんと言われて親しまれ、弁論部長に推されたり、『同志社文学雑誌』に「孤墳之夕」を發表したりして、蘆花は快活な学生生活を送っていた。

ところが、その若き蘆花の前に、「混血児かと思ふ程緒つちやけた髪を引つめの束髪に結った」、「眼尻の下つた鋭い茶色の目」をした少女が現われたのである。その茶色の目は、ときにまづげの下でうつとりと眠るようでもあり、とろとろと人を溶かす媚を含んでいるようでもあった。そしてまた、雷のように光るときもあった。この少女が山本久栄で、山本覚馬の娘であり、新島襄夫人の姪にあたっていた。蘆花は、この勝気な都会娘と恋におちたのである。この恋愛の経緯については、この恋が破綻してから二十数年経過した後、蘆花が刊行した小説「黒い眼と茶色の目」（大正三年）に克明に記されている。作中で同志社は協志社という名になっており、黒い目の

飯島先生は新島襄であり、茶色の目をした山下寿代は山本久栄であり、蘆花自身は得能敬二という名前になっている。「黒い眼と茶色の目」では、協志社の学生生活を背景としながら、若い男女の心の結びつき、周囲のきびしい反対にあって崩れてゆく恋の姿などが、なまなましく描き出されている。敬二を愛し、その理解者である飯島先生も、「寿代と云ふ女、よくない女です。……好い妻が欲しいなら勉強すべきです」と言い、敬二の母は、寿代を「悪魔」とのしるようになってしまった。動揺した敬二は、とうとう寿代に約束破棄の宣言をするのであった。蘆花にとって、それは悲しいことであった。

＊

久栄との恋をあきらめた蘆花に、深い寂寥がやってきた。傷心を抱いて、蘆花は清滝の旅館「ますや」にひきこもってしまった。清滝の秋を、蘆花はつぎのように描写している。

「秋は愛宕の麓の谷に深くあった。上流の高尾は知らず、楓は少ない此谷の山々も目立っているいろに染めて来た。顔を洗ひに行く、傍の葉鶴頭は、何時か霜にうなだれてしま

ふた。清滝川のほとりに下り立って、ぼつ然と岩はしる白い水を眺めて居ると、愛宕の頂から風が吹き落ちて、川音が轟と鳴った。而して若い仰ぐ青空から、木の葉の雨がはらはらと敬二に降りかかった。」（「黒い眼と茶色の目」）

「ますや」の主人、森田清治氏は、「明治二十年といえは私はまだ生まれてもいなかったが、『黒い眼と茶色の目』を読むと、いまの清滝と当時の清滝がまったく同じであることに感動する」と語っている（談交新社『嵯峨野』）。三週間「ますや」に滞在して、ユーゴーの「レ・ミゼラブル」などに読みふけた蘆花は、再び同志社にかえったが、追いつめられた自らの運

命を開拓すべく、その年の暮、西に向つて京都を出奔してしまつた。

昭和三十七年十月七日、蘆花三十五回忌を記念して、渡猿橋畔、「ますや」の庭先に、

蘆花の「文学碑」が建てられた。碑面には蘆花の筆蹟「自然と人生」がきざみこまれている。また副碑には、

「人は自然とけ合ひ

自然の懷に抱かれて

限りある人生を哀しみ

限りなき永遠を慕ふ

蘆花徳富健次郎の句

大塚節治 書」

ときざまれている。

建立世話人は京都蘆花会で、会長村田竹治郎校友会長、幹事岩本半、砂川千秋画氏であった。

（商高教諭・國語）



「黒い眼と茶色の目」のモデルといわれる山本久栄